
自殺のすすめ

メタかつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自殺のすすめ

【Zコード】

N5140E

【作者名】

メタかつ

【あらすじ】

自殺をするために樹海に向かった清水和也は偶然にも3人の自殺志願者と出会う。性別、出身、生き方も違う4人は死ぬ前に個々の最後の願を叶えようと/or>

第1話 樹海に行く

青木ヶ原樹海…

富士山の麓に広がる青木ヶ原樹海は富士、噴火の溶岩流上に形成された樹海として特異な様相を示している。多種多様な動植物と出会うことのできる人気の観光スポットであると同時に樹海にはもう一つの顔…

青木ヶ原樹海の俗称『死の原生林』…

一度入ると一度と出ることができない、360度変わらぬ風景で人の方向感覚を狂わせ樹海の奥へといざなう、自殺の名所中の名所。

この物語はあるひとりの男が自殺を決意し死の原生林に入るとこから始まる。

『富岳風穴駐車場』

「ソフトクリームください〜」

「あ〜よー」

小さな女の子はソフトクリーム片手に楽しそうにお喋りしている。沼津ナンバーの車、仲の良さそうな家族である。今日はハイキングにでも来たのだろうか？

「やっぱ樹海いいっすね！アガリクスやらホウタケやらレアなキノコ最高っス！そもそも樹海とは…」

「…………」

今度は樹海マニアだらうか？マニアックな話で売店のおばちゃんも困っている様子である。

ブチュー！

今度はトイレの裏で抱き合つてゐるカップル発見！なるほどこれが青姦か？てかホテルでやつてもらいたいものである…

樹海にはハイキングに来た者、デートに来た者、野鳥を撮りに来たもの、目的は違えど皆、楽しそうにしている…ひとりの男を除いては。

名古屋ナンバーの車である…その男は何をするわけでもなく車の中から人の流れを観察してゐる。男の名は清水和也、25歳。男は時々車の中からブツブツ独り言を言つてゐるようである。

この男こそがこの物語の主人公である。清水が何故自殺を考えたのかは後々書いていこうと思つ。

まず問題は風穴入り口売店のおばちゃんの田をビービーまかすかである。このおばちゃんは長年自殺志願者を見て來ている。自殺志願者には独特的のオーラがあると嘗つてもしもこのおばちゃんに捕まつてしまつと警察送りになることは田に見えている。これでは清水の自殺計画はパーである…

清水のとつた行動は単純なものだ…一般的の観光客と同じ素振りをする…

自殺への第一関門である…

「おばちゃんソフトクリームおこし〜…」

「あつがとね〜」

売店の前にはある家族と売店おばちゃんが楽しそうにお喋りしている。売店おばちゃんは樹海の見所を得意気に説明しているようである。家族も興味津々といった所と…そこに自殺志願者、清水和也が現れる。

「ソフトクリームください！」

女の子の後ろでとびきりの笑顔を見せる青年、清水和也。仲の良さそうな家族は何の不信感も抱いてはいない。清水は白のTシャツ、膝までのズボンをはき。肩には年代物のカメラをぶら下げている…どこから見ても爽やかな好青年である。この家族は夢にも思わないだろう。この青年が自殺志願者などとは…

だが売店おばちゃんだけは清水を違った目で見ているようである。

「兄ちゃん、ここ一人できたのかい？」

「やうだけど…」

「ふーん…」

清水はソフトクリームを受け取る。売店おばちゃんは清水をまじまじと見てくるようである。

「どうかられたの?」

「名古屋…」

両者、沈黙が続く…清水は怪しまれるような様子を見せたつもりはないがおばちゃんの長年の経験が何か臭わせるのだろう。清水は沈黙に耐えられなくなつたのかカメラを抱え声たかだかに言った

「今日は野鳥をとるんです！」

「そう…そうか！ そうだよねー おばちゃん考えすぎー いつぱい写真とれるといいねー」

売店おばちゃんは自分を聞いたりだすように言った。清水は数分おばちゃんと話をし樹海に入ることに成功する。最大の閂門突破である。あとは清水が下調べした通りに樹海を歩けばいい。

樹海と言つても案内看板や歩道が整備されキャンプ場やレストランまである。あらかじめルートを自分で決めておいた方がいい。樹海自殺は下調べが重要なのだ。

ちなみに清水がたどつたルートは…

・青木が原自然歩道

・氷穴、紅葉台

・山道

・死の原生林

「……」

「……」

そしてついに清水は死の原生林の中に足を踏み入れるのだった：

第2話 矛盾

俺の名は清水和也、年齢25歳…

俺の人生は暗黒に満ち溢れていた…

父はいない…俺が小さいとき女を作つて出でていつたらしい…父の顔を覚えてはいないしあいたいとも思わない。俺は母、女手一つで育てられた…でもそんな母ももうこの世にはいない…

俺の人生は敗北の連続だった…

小、中学校の時に父がいないことでイジメられたりもした。その頃のあだ名がCO2…いてもいなくとも一緒に言つ意味らしい…笑えるだろ?

俺は俺をイジメた奴らを許さない…俺が死んだら奴らを呪い殺してやるうと思つ。

3流高校を出て3流企業に入る…

こんなできそこないな人間が出来ることといったら流れ作業しかなかつた…流れ作業だぜ!トイレに行く前にボタンを押す流れ作業だぜ!誰でも出来る仕事流れ作業…でもね…こんな流れ作業さえも出来ないどーしようもない人間だつているんだぜ…俺だよ!俺のラインだけネジが入つてないんだよ…左藤と言つ上司が言つてたつけなあ…

「お前はほつちの粗大ゴミだ!」…てなあ

俺が死んだら左藤も呪い殺してやるうと思つ。

でもね…こんな俺でも向上心はあるんだ…俺はねこのままじゃいけないと思つた。俺は死にもの狂いで勉強した。人生で最初で最後の努力だ。俺はね資格を取ることにしたんだ。

3年がたち、5年がたち何度も何度もテストに落ち…そして6年め…ようやく念願の資格NCCマシニングセンターを取ることに成功したんだ。

NCCマシニングセンター…NCCの中でも最も高度の技術を必要とする。これで機械加工が出来るもう粗大ゴミなんて呼ばせない。

俺は生まれ変わった。俺の人生は光り輝いている…

⋮⋮⋮

浮かれてたんだな…俺は結局粗大ゴミだった。入社2ヶ月で俺はあんなミスをしてしまった…もう会社に居たま再くなつた…

⋮⋮⋮

わかつたよ…
もうわかつた…

俺は生まれながらにゴミなんだ。どんな努力も意味がないんだ……いるんだなこういう人間も……俺は死んだほうがいい……

俺の人生は暗黒に満ち溢れている……

樹海……

お似合いだ……

俺にはお似合いだ……俺は人々の記憶から忘れ去られる……清水和也の存在自体が消され……

これで暗黒の時代ともおさらばだ……

⋮

⋮

さよなら……

疾風…

それは疾風のようだつた。清水和也が死を覚悟し首に縄をかけた瞬間強烈な風をあび辺りの木々が有り得ない方向へと曲がり太陽が頭を覗かせる。太陽の光の先にある光景を見た瞬間無意識に体が動いた。

皮膚に突き刺さる木々を押しのけただがむしゃらに走る…

何度も転び起き上がった…

そして気がついたときには体中擦り傷にまみれ、額には土の感触をして両手にはふくよかな感触があつた。この時でもまだ清水は自分がしたことを理解できいでいた…本当に無意識からの行動だったのだ。

清水が見たもの…それは今にも首を吊るつとするひとりの女性だったのだ…

押し倒した様な形で横たわる一人、数分時が止まつたように見つめあつ一人…すると女性の口元が歪んだ。

「君はここにいるって事は自殺しにきたの？」

「……」

清水は女性の声で我にかえり、サツと女性の体から離れる。とても美しい女性だつた…そしてどこか懐かしい…

「そうでしょ？ここにいるって事は死にに来たんでしょう？へー君は自分は自殺するけど他人は自殺しちゃいけないんだ…」

「そ……それは……」

清水自身なぜ助けたのかもわからない…

ただ自然と体が動いた。自分はここに自殺しにきたのだ。これは確かにこと。だがまさか自分と同じ自殺志願者に会うなんて夢にも思わなかつた。何で助けたのだろう?自分自身に問いかけても答えは出ない…

女性は呆れたように清水を見下ろしまたロープに手をかけた。そして投げ掛けるようにこう言つたのだ。

「私は死ぬわ……お先」

女性は飛び上がるよつて首をロープに押し当てた

ガツ!

「…………」

「…………」

「喧嘩売つてんの一……君も首吊りに来たんでしょーー何でも止めんのよーー」

「うへ……」

清水はまた体が自然と動き女性を押し倒してしまつた。女性は鬼のような形相をしている…

「ちよつと何か言いなさいよーー自分の目の前で首吊られるのが嫌な

わけ！

「やー言ひ訳じゃないけど……」

「…………」

「…………」

「……わかつたわ……頬から首吊りなぞ……私見ててあげるから……君が死んでから私首吊るわ……邪魔されたくないもの……ほら、わかつたらサッサと首吊りなさいよおー！」

女性の出した提案それは先に清水が首を吊れ……と言ひものだつた。女性はとにかく自分の首吊りを邪魔されたくない一心だ。清水は渋々マイロープに手をかける。

「…………」

「…………」

何故かそれ以上体が動かない。さつきはあんなに死ぬき満々だったのに……ちらりと女性に視線を送る。女性は腕を組み呆れたような表情をしてくる。

「…………」

「…………」

さうして視線を送る。女性は眉間にシワを寄せ。舌打ちを始める。

「…………」

「…………」

それには視線を送る…

「男でしょー。ウジウジしないー。死ぬときは死ぬー。早くしなさいー。」

清水は女性の怒鳴り声でよけやく力を込めることが出来た。

ああ…これで暗黒の時代ともお別れか…

今度はホントにホントだ…

それなりに…

清水が死を決意した瞬間だった…

「みんな皆殺しアルネー。ボク死んでみんな呪い殺してやるアルネ

——「

清水の後ろから男の怒鳴り声が聞こえてきたのだ！その声は清水より太く怒りに殺意にも満ちた怒鳴り声だった…

そして清水は自然と体が動いた：あの女性もその声の元に走り寄る。

ガツ！

「……」

「……き」

「君達、何アルカー！死なせてくれアルネー！」

清水は声の主に怒鳴った

「死んじゃダメだ！死んじゃダメだ！死んじゃダメだ！生きればきっと良いことあるさ」

「そうよそうよ…死んじゃダメ…

女性も必死で叫ぶのだった…

第3話 4人の自殺志願者

「死んじゃダメだ！今は辛くてもきっと楽しい」ともある…」

「ううよ…ううよ…死んじゃダメよ…」

男はキヨトンとしている。この2人は自分を助けようと必死になつてていることはわかる。でも良く考えたらここは死の原生林…ここにいるつて事はこの2人は自殺志願者じゃないのか？

「……」

間違いなさそうだ…2人の後に首吊りロープが仲良く一組並んでいるのが見える。そして男は不思議そうにたずねた？

「あなた達も首吊りするためにここに来たアルカ？」

「そうだ！」

「ううよ…」

「あなた達自分は自殺するけど他人の自殺は許せないアルカ？」

清水と女は固まってしまった。このやりとりは先程2人が行つていしたものと同じだ…何故たすけた？わからない…本当にわからない…2人はキヨトンとお互いの顔を見た。

「と・に・か・く・ボクは死ぬアル！お先アルネー！」

男が再び首にロープをかけた瞬間だった…

ドガツ！

清水は男の頬に鉄拳を入れた。

「死ぬな！」

「そうよ！死んじゃダメーー！」

「……」

男は地面に這いつくばり口元を手でぬぐつた。手が真っ赤に染まっているのがわかる。そして2人は鬼のような形相で男を見下ろしていた。そして清水は男の両肩に手を置き必死に呼び掛けるのだ…

「死ぬな！」

「死にたいアル…」

「死んじゃダメだ！」

「死・に・た・い・アルーー！」

「死ぬんじゃない！」

「てかあなた達も自殺志願者じゃないアルカ？他人の自殺は何でだめアルカー？」

確かに！…つと清水は思った。自分はここに自殺しにきたのだ別に人がどおなろうと構いやしない…自分は何で自殺志願者を説得しているんだ？うーん…わからない…そもそも俺は本当に死ぬ気だった

のか？

……

それは突然の出来事だった。

偶然にも出会ってしまった3人の自殺志願者の前に疾風のごとき強烈な風が吹いたのだ…空気は一直線に層を作り木々をなぎ倒す。それは偶然とは呼べないよつた奇跡の風…
そう奇跡の風だ…

その風の先にはある男の姿を写していた…その姿を見て真っ先に体が動いたのは誰であろう先程、死にたい…とわめき清水に説得されていたあの男…

「…………」

「…………」

「し…死んだらダメアルネー！死んだら親が悲しむアルネー！」

「そうだ死んだらダメだー！」

「そうよ！死んじゃダメよ！」

アルネ男（分かりにくくなるので以下こいつ書きます）の田の前にはまるでブタのような男（以下ブタ男）が転がっていた。ブタ男は仕切りに胃液のような物を口から垂れ流しアルネ男を見る。その瞳には疑問と憎悪が満ち溢れていた。

「何するんだブウーーお前たちも自殺しに来たんじゃないのかブウーー。どうこうつもりだブウーー！」

「死んじゃダメよ！辛いことばかりじゃないわよ？死んだら終わりよー！」

女は必死に呼びかける…

「死んだほうがいいんだブウーー生きてても何もいいことないんだブウーー！」

「辛いことあるなら話してみてーきつと楽になるから…」

女は優しくブタ男の手を握った。『惑うブタ男…田頃から女性に優しくされたことがないのだ』

「お・ね・が・い…」

「ブ、ブウー…」

甘つたるい声を浴びせる女…ブタ男もだんだん落ち着きを取り戻してきただよ。

「…………

「…………

「わかつたブウー……」

こうして偶然にも出会ってしまった4人の自殺志願者。これからどうなってしまうことやら……

第4話 ブゥーとアルネの過去

僕の名前はブタ男（仮名）28歳。6人家族の次男として生まれ何不自由ない生活を送り大学卒業後、某食品マイカーの営業として活躍していたんだ。

そうあの日までは…

あの日はとても暑い日だった。僕の額からは汗が垂れ、シャツはべトべトになっていた。でもここは室内だも�ん快適な空調設備も整っている。汗の原因は暑さだけではなかつた。アゴから流れされる汗を感じる度に僕の心は凍り付いていくのがわかる。

ここは某総合病院。僕を死に追いやることになったのはある医師の一言だった。

忘れもしないあの医師とのやりとり…

「せ……先生……もう一度言つてくれブウー……」

「だ・か・ら・ねブタ男さん！君は慢性的な糖尿病にかかっているからこれからは食事制限しないといけないって事！」

「う……嘘だブウー……」

「嘘じやないー！のままじや死んじやうよアナタ！」

僕は日頃の大食いがたたり慢性的な糖尿病にかかってしまったのだ。食事制限しないとこのままだと死んでしまうらしい。

食欲……

人間の三大欲求のひとつ……でも僕にとっては最重要欲求だった……その欲求に制限がかかる事の辛さが君達にわかるか？

もつうラーメン三郎ベトベトカラカラ油豚骨ラーメンも食べれないと
言つ……

吉屋のつゆベツチョリ超ダクダク牛丼も食べるれないと言つ……

ポテトチップスも一日ひと袋……

サラダ油ボトルも一気飲みできない……

…………

だから僕は死んだ方がいいんだ…人生の最大の喜び『食』に制限がかかることの辛さ…誰が知る？僕に残された道…

だから僕は樹海に来たんだ…

「…つと言つわけだブゥー…だから僕は死ぬしかないんだブゥー…」

「……」

「……」

「ブ…くだらないアル」

アルネ男である。アルネ男は口元を手で押さえ皮肉を込めて笑っているようだ。ブタ男は眉間にシワを寄せアルネ男に問い合わせる。

「何がくだらないんだブゥー？」

「そんなん食事我慢して他に楽しいこと見つけばすむ話アル！君は死ぬ資格ないアル！本当に死ぬほど苦しいとは何か教えてやるアル！」

そしてアルネ男もゆっくりと自分の過去を語り始める。

僕の名前はアルネ男（仮名）35歳。僕は四川省のある農家に生まれた裕福ではけつしてなかつたけど幸せだった。優しいお母さん、厳しいけど第一にボクの事を考えてくれるお父さん…

ボクはそんな両親を尊敬し大好きだつた。僕の夢は両親を楽にしてあげること。

ボクは死に物狂いで勉強した。当時の中国は学力がすべてだ、一流大学を出ることは人生の成功を意味する。そしてボクは勉強のかいあつて某一流大学に入学することができた。

そして卒業…

ボクの人生は保証されていた。これで金銭的にも両親を楽させてあげることができる… そうなるはずだつた。ボクの人生を変えたのは教授の一言だつた。

「アルネ男君、日本に行つて技術を磨いてみないか？」

「…………」

当時、大学では機械加工を専攻していた。教授が言つには日本に行って最先端の加工技術を学びその技術を中国の発展に役立てほしい… つと言つことだつた。ボクは断る理由もなく一つ返事でOKしたんだ。

そして日本へ…

ボクは一流メーカーに外国人研修生として迎えられた。日本の最先端 CNC 技術を学べる…日本のノウハウを学べる…

そう思っていた…

1ヶ月がたち2ヶ月がたち…ボクに任せられる仕事と言えばバリ取りとハーネスの組み立て…いわゆる雑用だった。毎日深夜まで残業し単純作業の繰り返し…でもいつか CNC 機器を学ぶ事が出来ると信じていた。だから頑張る事が出来た…全ては親のため母国の発展のため。

1年がたち2年がたつ…

いまだにバリ取りとハーネスの組み立てしかやらせてもらえない…自分自身、不安になつていつたよ…このまま何も出来ず終わるんじゃないかな…そしてボクは社長に直訴したんだ。

「…………」

「…………」

「もう一度言つてみる」

「いや、だからアルネ… NC機器を動かしたいアル… 単純作業はあ
きたアル… ボクは日本の最先端技術を学びにきたアル」

「シナ人に日本の技術がわかるとでも?」

「……」

ボクは全てを理解した。この社長は中国人を差別している… この社
長の元では一生技術を学ぶことは出来ないと…

屈辱だった…

この2年は全く意味の無いもの… そしてこのまま日本にいても… そ
してボクは帰国することにした…

当時の研修制度は帰国時に今までの給料が全額支払われることにな
っていた。ボクは帰国前日、社長の前で給料を受け取った。

「……」

「……」

言葉が出なかつた…

研修生の時給は700円と聞いていた… しかし明細には250円と
されていた… さらに毎日の深夜までの残業は全てカット… ボクの計
算より300万円少ない… 僕は悔しくて悔しくて… そんなボクを見
て社長は言つた。

「シナ人! 給料もらつたらとつとと消えろ! 僕はテーマ等シナ人が

で～嫌いなんだよ～研修生入れろつて役所が言つから仕方なくな～」

「…………」

「おい！何固まつてんだよ！シナ人にはお似合いの給料だろ？パク
リ大国のクソシナ！」

「話が違うアル…」

この時ボクの中の何かが音を立てて切れた…

「話が違うアル！時給700円のはずアル！残業代払えアル！ボク
が中国人だからこんな酷い仕打ちするアルカー！」

「そうだ！シナ人はゴミ以下だ！金払つてやるだけ有り難く思え！」

「…………」

「…………」

「…………う」

「ウワア―――！」

ボクは自暴自棄になつてその場から逃げ出した。屈辱の連續…ボク
は自分自身がもう嫌になつっていたんだ…

そして樹海に来た…

「…つと言つわけアル…ボクは中国を否定され自分を否定されもう

自信がないアル…もう死ぬしかないアルネ…」

「…………」

「…………」

「……フ」

3人がある男の顔を一斉に見る。清水である…清水は皮肉を込めて笑っているように見える。アルネ男は眉間にシワを寄せ清水に言った。

「何がおかしいアル力？」

「ククク…そんなん全然自殺の理由になつてねーよ…大体ずっと中国に暮らしている人もいるんだろ？中国に戻れば済む話じやん！贅沢な悩みだ！大体、親はどうすんだよ？」

「…………」

「俺が自殺する正当な理由を教えてやるよ…」

そして清水は自分の過去をゆっくりと話始めるのだった。

第5話 清水と垂紀の過去

俺の名前は清水和也。俺はこの4月、Y金型加工マイカーの技術者としてむかえられた。俺に任せられたのはNCマシニングセンターと言う機械だ。NCとはパソコン上でプログラミングを行い、そのプログラムを機械本体に送り、刃がプログラム通りに動くと言つもの。

俺はNCマシニングの資格を持つてるとこのもあってか特に機械にハマつと言つこともなく順調に仕事を覚えていった。

そして2ヶ月がたつた…慣れてきた頃が一番ミスをするといふ…でもそれだけが原因じやないはずだ…

300万…

俺が会社にあたえた損失…機械の軸がずれ全ての原点が狂つた。全ての製品の寸法を狂わせた…

会社に与えた損害300万…

俺はこの時悟つたんだ。何をやつてもうまくいかないぢ~しょつもない奴はいる…努力したところで…無駄なんだ…

会社の人の声が『死ね』と聞こえた……

俺の人生は暗黒に満ち溢れている……きっとこれからも…楽しいなどない…ならばいつその事……

死のう…

「……つと詰つわけだ…何をやってもうまくいかない…」この辛さわかるか?本当に辛いとはこういう事を詰つんだ!」

「……」

「……」

アルネ男もブタ男も黙つて話を聞いていた。ところが女だけは違つた。女は口元を手で押さえ必死で笑いをこらえているようである。清水にしてみたらたまつた物じやない自分を『死』まで追いやつた出来事を笑われたのでは…当然のことく清水は女に詰め寄る。

「何がおかしい!」

「いや…300万で自殺なんて…呆れて…」

女の笑い声が強くなる。清水の声もより強くなる

「何がおかしいんだ！」

「…………」

「言えよー。」

「…………」

女は周りをグルッと見た。清水は怒りに満ちた目をしている。アルネ男とブタ男は次に女が言う言葉を待っているように見える。そして女はため息をつき、3人を睨みつけた。

「みんな自殺する理由になつてないわ！一度頭冷やしてらつしゃい！私はね……」

女は自分の過去をゆづくりと話し出すのだった…

私の名前は亜紀、28歳…私は某テレビ局の女子アナをしている。私は子供の時から才女とよばれこの容姿だけでなく勉強もスポーツも何をやっても一番だつた…地元では陸上次期オリンピック代表確定とも言われたわ…でも私はそんなものには興味がない…小さい頃から私はテレビに映る女子アナに憧れていた。

私の夢は女子アナになること…

だから東大をけつて慶應にはいったの…当時、慶應出身の女子アナが多かつたからね…そしてミス慶應に輝いた。順風満帆だつた…全ては思い通りに言つていた…

私は某テレビ局に入社する事が出来た。3人の同期の中で私はアナウンス技術、アドリブ全て群を抜いていた…と思う。そして某バラエティー番組のアシスタントに抜擢される。新人として会社の評価

も高かつたわけね…

芸人とのやりとり、切り返し…自分でも満足できるものに仕上がった。それからどんどん仕事が増えていった…でもどれもバラエティーの仕事ばかりだった

本当は私は報道の仕事をつきたかった…でも新人の頃の私はどんなことでもチャレンジした…自分のアナウンス技術向上のために繋がるものだと信じていたからね…

同期の女子アナは私を羨んでいたようだけど私はちっとも満足できなかつた…半年程たつた頃には私は…

バラエティーアナのレッテルを貼られていた…

社長の言葉だ。結局社長は女子アナを商品としか見ていなかつた。

そして私はフリーになつた。

私は自分のやりたい仕事をやるためにフリーになつたのだが現実は皮肉なものだ。来る仕事、来る仕事バラエティーだから…すでにバラエティーアナというレッテルが貼られていた…どんなに頑張つたところでバラエティーアナの評価があがる一方だつた…

価値観の違い…

私はいつも本当の自分は他の所にいると思っていた…
テレビで報道の仕事をしている女子アナを見ると悔しくてたまらなかつた…涙が出てきた。私は買い物をしててもサインをもとめられ指を指されたり…周りは私をチヤホヤしたり…私はアイドルじゃない…私は女子アナ。

私は女子アナだ…

好きな女子アナ1位…

結婚したい女子アナ1位

面白い女子アナ1位…

何なのこれは？

女子アナに人気は必要ない、面白い必要ない。報道は事実をありのままに伝えればいい。自分の主觀は入れるべきじゃない。小さい頃憧れた女子アナ…
私が求めるは何？

もひ自分自身に嘘をつけない…死のひ…

死のひ…

「…ひと言つわけなの…私は自分を殺してまで仕事する気はないわ…極端かもしけないけど自分を殺すくらいなら死を選ぶ…」

「……」

「……」

「君を見たとき何故か懐かしい気持ちがした…これでわかったよ…俺は君をテレビの中で見ていたんだな…」

清水は少し悲しそうな顔をして垂緒を見た。そして思い詰めたよう

「…ひひひつた。

「結局、自殺の理由なんて人それぞれかもな…他人が人の辛さなんて分かりっこない…自殺の理由を否定するべきじゃないような気がする…」

「…たしかにそうアルネ…」

「右に同じブー…」

「……」

「死のうか?」

それからには無言で皆ロープを木にくくりつけている。一つの枝に4本のロープが掛けた様は何か芸術とも呼べるような異様な雰囲気だ。

「みんな人生に悔いはないな?」

「…悔いはあるブウ」

みんなブタ男の顔を見るブタ男は空を見て涙を流している…

「一度でいいから… 一度でいいから…」

「……」

「北京ダックを死ぬほど食べたかったなあ…」

ブタ男は泣いていた
..

第6話 北京ダックを食べて自殺する

つい数時間前には樹海で自殺を決意した4人の自殺志願者達。今は4人仲良く某高級中華料理店で席を並べ座っている。

全てはブタ男の一言。

「死ぬ前に北京ダックが食べたい」

この一言が4人の気持ちをひとつにしたと言つたら大袈裟か?どちらにしても自殺を踏みどどまりブタ男の夢を叶えるため一致団結した…つと言つのも大袈裟か?

4人は自然歩道の近くの樹海で自殺を計らうとしていたので迷うことなく風岳駐車場に戻ることは容易だつた。車はもともと清水がのつてきた車を使った。目的地は横浜・亜紀の常連である某高級中華料理店だ。女子アナだけあって旨いものを食べ尽くした亜紀のお勧め店なら間違いないだろう…

亜紀をのぞく3人はこんな高級店來たことがないのでキャロキャロと落ち着きがない。

天井に輝くモダンなシャンデリア、高価そうなツボ、わけのわからぬブロンズ像、さらにここはソーラとかかれた個室である。

「このとびは」利用ありがとびやこます。私、料理長の岸部ともおします

料理長みずから挨拶に来る。さすがはスーパー女子アナ亜紀である。亜紀はそっけなく注文をする

「今店にある北京ダック全て貰えるかしら?」

「は?..す、すべてですか?」

「そうすべてよ」

「か、かしこまつましたー!」

料理長の驚いた顔を見て亜紀はクスッと笑った。ま~当然だろ?こんな注文する客いな~だらうから…ちなみにここの北京ダック一人前、2500円である。亜紀は胸ポケットからタバコを取り出し一服。

「あの~トイレにきたいブゥー」

「あつ僕もアル…」

「右に同じ…」

3人は緊張の色を隠せない。そしてトイレでも驚きの声を上げることになる。黄金の便器、蛇口は竜の置物のような形…もちろん黄金!こういうのを無駄に高級と言つ!

3人はトイレから戻ると既に料理が置かれていた…
フカヒレの姿煮、アワビのXOジャン炒め、ツバメの巣のサラダ、
そして北京ダック…

「今日はブタちゃんにとつて最後の晚餐よ…北京ダックだけじゃなくて中国高級食材を好きなだけ食べてね!他に食べたいのあつたら好きなだけ注文してね!」

ブタ男は涙を流し喜んだ。亜紀がまるで神様のようにさえ見える。亜紀の手ほどきでまず北京ダックを食べる。北京ダックは豚の皮を水飴で固め、野菜を包んで食べる…

箸を持つ手が震える…これが夢にまで見た北京ダック！一生食べる事がないと思っていた北京ダック一口の中にほある

パクリッ！

- 1 -

「うーうますぎだブウーーこの肉の味を生かしたタレと野菜とのハーモニー口に入れた瞬間頭の中では…」

草原！

ブタ男は数分天井を見上げあまりの旨さで直立不動になる。

「せつみんなも遠慮なく食べてねーお金はこぐらでもあるから」

こんどはアルネ男がフカヒレの姿煮をとつた。だがアルネ男は本番中國の人間：所詮日本の中華などたかがしれている…と思つてゐる…

パクリッ！

「う、うますぎアル…！」のとろけるような歯触り…僕が今まで食べたきたフカヒレはなんなんだアルカ！」

アルネ男も放心状態！

「おかわりブウー！」

ブタ男は既に北京ダックを食べ終えた。ものの数分で！厨房は戦場のような忙しさになつた！

「アワビもうまいブウ！」

北京ダックがくるまで他の料理に手をつけるブタ男。清水は高級食材を味わって食べているようだときどき頷いている。亞紀は食事をせずひとりタバコをふかし笑っている

「北京ダックおまちどおとまです！」

パクパクパク！

「おかわり！」

異常な速さでたいらげるブタ男…

死期を悟った動物は子孫を残すために必死になるといつ…今のブタ男はそれに近いのかもしれない…自分は死ぬ…死ぬ前に食べれるだけ食べる。

「おかわり！」

すでに北京ダック1人前食べている。さらにスープ、金華ブタのステーキ、アワビの姿煮… もろもろ食べている。この男に満腹中枢はないのか？

「おかわり！」

無いようである…

「北京ダック… こんなに食べれるなんて夢みたいブウー！おかわり！」

そこなしの食欲3人は呆れたようにブタ男を見ている。もひブタ男以外お腹はいっぱいなのだ。

「おかわり！」

.....

厨房の北京ダックが全て無くなつたところで最後の晩餐は終わつた。亜紀は会計をすませると4人は外にでる。時刻は5時を回つていた夕焼けが4人を包む。

「ブタちゃん満足した？」

「満足ブウー… もう思い残すことないブウー」

「.....」

この時のブタ男の夕日に照らされた笑顔は一生忘れることがないだ

るつ……4人は無言で車に乗り込み深夜まで横浜市内をブラブラと走った。そして深夜1時……4人の向かつた場所は……

マックスバリュー

この時間のマックスバリューは数えるほどしか客はない。4人は障害者トイレの中にはいる。4人はいると少し圧迫感さえある……

「みんなありがとうブウー……最後に僕の夢叶えてくれてありがとうブウー……」

「…………」

ブタ男は右手にロープを持つている。ロープの先端はわつか状だ……

「清水君……アルネ君……亜紀さん……君たちに最後にあえて良かつた」

「…………」

誰一人としてブタ男に声をかけるものはいない。みんな下を向いて黙っている……ブタ男は天井の金具にロープを結びつ便座に立つ。便座から降りれば彼の人生は終わる……

「みんなそんな悲しい顔しないでブウー……僕はみんなにあえて良かつた……みんな大好きブウー……」

「…………」

そして……

死んだ…

ロープからブラブラと揺れるブタ男…

「ブタちゃんの顔…幸せそう…」

「そうアルネ…」

このとき亜紀は涙を見せながらも最高の笑顔だった。まるで何かをやり遂げたかのような…達成感といつたらおかしいか？

「ブタ男の人生はこれで幸せだったのかな？死ぬ前に大好きな料理を食べて幸せだったのかな？」

「それはブタちゃんにしかわからないわ…」

亜紀がいう。3人は外にでて車に乗り込んだ。当たりはずすでに真っ暗で街頭の光だけが3人を照らしていた。

「ブタちゃんは夢を現実のものにした…私は幸せだったと思いたい

…」

「夢アルカ……」

このときアルネ男の表情が変わった。

「みんな聞いて欲しいアル、僕にはひとつやりたいことがある……」

清水と亜紀はアルネ男の顔を見た。

「僕は……僕は憎つべき日本人を殺したい！それもひとりやふたりじゃない！大量に殺したいアル」

「…………」

3人は無言で車を走り始めるのだった。目指すは……

東京……

第7話 竹下通り連續殺人事件（前書き）

残酷描写あります。注意を…

第7話 竹下通り連續殺人事件

竹下通り… 東京都原宿区にある商店街の通りは若者向けのファッショングループが立ち並び昼夜とばず若者が足を運ぶ。デートに来たもの買い物に来たもの… 様々な人が竹下通りにはいる…

時刻は午後2時… 竹下通りの外れには不自然な白のセダンが一台止まっている…

竹下通り… これから起ころる惨劇の舞台…

「本当は重火器も用意したかったんだけど…」

「いや… これで十分アルネ…」

車内では何やら物騒な会話。それもそのはずアルネの手元にはオノ、青龍刀、ナイフが置かれているのだから… 清水は無表情で刃物を見ている。

「本当にやるのか?」

アルネ男は黙つている。亜紀も黙つている…

これから起ころる惨劇を知るのは誰もいない…

アルネは右手でオノを握りしめ左手には青龍刀、ナイフは腰元にさした… アルネ男は2人の顔を見る。2人は下を向きアルネ男を見ようとしている。

「清水さん、亜紀さんなんで人は人を殺してはいけないかわかる?」

「…………」

「それは法律があるからアル…人間は知性とともに嫉妬、人を憎むことを知つた…」

「…………」

「人は法律さへ無ければ人を殺す…願望アルヨ」

「…………」

アルネ男は一度大きく深呼吸をしどびつきりの笑顔で2人に声をかける。2人が聞くアルネ男の最後の言葉…

「謝謝…」

謝謝…2人にかけた最後の言葉は中国語の『ありがとう』なぜ最後に中国語を使つたのかはわからない…2人には決してわからない…だが夕日の向こうに消えていくアルネ男の背中はどこか寂しそうにさえ見えた…

…………

後に竹下通り連續殺人事件の奇跡の生還者…毎日新聞記者、鈴木和男氏は語る。

5Mぐらいでした。私の5Mぐらい横にカップルが談笑していたのを覚えています。まあ私はメールに夢中で気にもとめなかつたですね…すると耳障りな音が聞こえたんです。

ブチャ…いやグチャかな。そう、スイカ割りのスイカが割れた音に似てたかなーとにかく不快な音です…

はぜたんですよ…

え?何がって?いや頭ですよ…女性の頭が割れました…目玉が垂れ下がり脳みそが道端に散らばっていたのを覚えています。女性の横の男性…多分彼氏です。彼女の脳ミソを被りながらも一步も動かないんです…男性の背中からナイフが見えました…その瞬間初めて男性は叫び声をあげましたよ

ギヤーー!とも…なんとも形容しがたい声です。男はナイフを引きにき腸を引きずり出していました…その間ずっと苦悶の表情で叫んでいました…

みんな氣づいていたはずです…でも逃げないんです…クレープを食べている者、待ち合わせにきた者…みんな時が止まつたかのように逃げないんです…

人は本当に恐怖を感じたときには動けなるんですね…現に私もそうです仕事柄、コソボ紛争…イラクなど危険な取材を數々こなしました…そんな私でさえも一歩として動くことは出来なかつた…

男は刃渡り40センチほどある刃物で少女の目をエグリ飛ばしました。まだ年もいってない子供をですよ？あの刃物青龍刀って言つんですかね？もう後は血の海です……

首を飛ばしたり、人間の頭から股間までを切り裂いたり……男は切り取った頭を踏みつけたりしていました……すでに何人の人間を殺したかわかりません……男は返り血で真っ赤でした。

私は忘れません……男は笑つてたんですよ。笑いながら人を殺していたんですよ……でも妙なことに男は涙を流していました。涙を流し笑っていたんです

男は人を殺しながら叫んでいました、中国語だったと思います。私は仕事柄中国語も少し出来ますので……でも男は興奮して何をいつてるのか聞き取りずらかったです。ゆういつ聞き取れた言葉は……

『日本人』『死ね』『こんなはずじゃない』……という言葉でした。

犯行に及んだ時間は20分程度だったように思います。もう血の海でした男は息絶えた人間の顔を何度も何度もオノで叩いていました。やがて男の動きは止まり天を仰いでいました……

男の周りには脳漿や腸が飛び散り……この世のものは思えなかつた……お恥ずかしい話ですが私はこの時失禁していました……

そして男は自分の首に刃物を当てたのです。いや……一気にです。何の躊躇もありませんでした……一気に喉仏のあたりをひとつきです……男は倒れピクリとも動きませんでした……

私は男が自害する前に妙な事を言つたのを覚えていました。

「謝謝…」

意味はわかりません…誰にありがとうと言つたのか分かりませんが妙に耳に残っています。

これは後に聞いた話なんですが男は日本の派遣会社と給料の面で揉めていたそうですね…巷ではこれが動機と騒がれているようですが私はそうは思いません。

彼は中国ではエリートでした…彼の将来は約束されていたはずです。なぜこんな事件を起こしたのか?それは人間のもつ本質的な深い部分の闇じゃないでしょうか?

極論、彼は…いや人間は殺人願望をもつて生まれてくるとしか思えない事件でした。

「はい、ありがとうございます。奇跡の生還者、鈴木和男さんでした。いつたんスタジオに返します」

人は残酷な生き物である

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5140e/>

自殺のすすめ

2010年10月9日07時58分発行